時事新報は全國中紙面の最も廣き新聞紙なり　時事新報には毎號詳細なる商況物價の報告あり

時事新報

第三千二百六十八號
明治廿五年二月十八日　木曜日
舊曆壬辰正月廿日　(庚辰)
日出午前六時二十七分　日入午後五時二十四分
月出午後十時二十六分　月入午前九時六分
滿潮午前八時四十三分　午後八時五十七分
(西曆一千八百九十二年)

時事新報定價
時事新報は毎號八面乃至十二面にして詳細の商況物價報告あり其代價遞送料廣告料は左の如し
一枚二錢〇一箇月前金五十錢〇三箇月前金一圓五十錢〇六箇月前金三圓〇一箇年前金六圓〇月曜休刊
〔〇時事新報社ヨリ直接ニ遞送スルモノハ右定價ノ外ニ一箇月十三錢の遞送料ヲ申受ク〕

時事新報廣告料(前金)

一行五號活字廿四字詰	一限日	一日以上六日迄	七日以上
一行ニ付	十三錢	十一錢	十錢五厘

本社へ寄稿に付

東京府下を始め各府縣に通信社なるものありて是より各新聞社に報道を發送し各新聞社は之を受けて紙面を填塞するより各社同一の記事を掲ぐること尠からず獨り時事新報社は社員並に通信員の多きを以て斯類の社に通信を依頼せずと雖も世間往々此事を知らずして通信社にさへ報道すれば本社にも其報道は達する事と信ずる方多きが如し爲めに行違ひを生じたる場合も尠からざれば本社に記事論説を寄稿せんとする方は直接に本社に向け發送あらんことを請ふ

時事新報

衆目を惹くの工風肝要なり

(去る十四日の續稿)

我輩は前號の紙上に於て明年米國のシカゴ府にて開設の萬國博覽會には我國より品物を出すと同時に人を出すの工風も肝要なる可き旨を述べたり出人の工風とは我實業家を多く彼地に出して實況を視察せしめんとの趣意なれども明年の博覽會は其規模計畫餘ほど廣大にして從來催したる博覽會の比に非ず古今未曾有とも稱す可きものゝ由なれば各國の氣込も亦一入にして出品の數も必ず多きことならん我國にても官民の注意熱心に由り出品の手配等も抜目なきが如くなれども右の通りの次第にして各國競ふて優劣を爭ふ其中に我品物をして特に衆目を惹かしめんとするは頗る困難にして何か特殊の趣向なかる可らず抑も我國の工藝品が一種摸倣す可らざる獨得の長所を具ふるは今更ら云ふまでもなき所にして世界各國に誇るに足る可しと雖も扨斯る美術的なる物品を製出するの技術に至りては專ら器械的の製造を事とする外國人などの到底思ひ至らざる所にして日本人に特有の妙技なれば其技術を實地に演じて彼國人に示すが如きは衆目を惹くの最良手段なる可し聞く所に據れば今回の出品に就ては其筋の人々も種々に工風を凝らし或は金閣寺の模形を製して出品するの趣向などもあるよし單に藝術上の標本を示すが爲めとしては是等の趣向も妙ならざるに非ざれども何分にも世界の各國より出品の多き其中なれば如何に高尚優美の品にても特に注意を惹くの工風なきに於ては他の物に壓せられて空しく衆目の外に排斥せらるゝの恐なきに非ず故に我輩の立案は物を出すと共に其物を造くる實際の技術を目前に演じ注意を惹くの工風にして其方法は我國の職工を連行きて會場に於ける我出品陳列所の傍に製造所を設け漆器、陶器、織物又は其他の工藝品なり其場所に於て製造の實地を縱覽せしめんとするものなり元來器械を使用する外に物を製するの術に慣れざる彼國人の眼には日本の職人が單に手先を以てするか假令ひ或は器械を用るも一種固有の工風を以て美妙なる種々の工藝品を製出する技術を見て驚かざるものはある可らず忽ち場內の評判と爲りて見物人は我陳列場に群集し先づ其細工の奇妙なるに驚くと同時に次第に其品物にも注目して我出品の聲價を博すること(あ)る可し數十名の職人を連行き製造所を設くるが如きは費用も些細の事なれば場內の衆目を惹くが爲めとして是種の工風は最も肝要なる可し又一つの趣向は我國の役者を渡航せしめて演劇を催すの一事なり演劇は我美術上の發達、古今の風俗及び衣食住の有樣等をも示す者なれば役者は必ず上等の者に限るとして例へば團十郎菊五郎左團次の中その一行を雇入れて彼地に渡航せしめ會期の間、場內もしくは其近傍に於て忠臣藏の如き高尚優美の劇を演ぜしむるときは必ず好評を博して我國演劇の發達を示すと同時に間接に風俗習慣の美を知らしむるの效用あるのみならず費用の點より云ふも出入相償ふて必ず餘贏を見る可しと云ふ右は我輩の發案に非ず或る外國人の趣向なれども我輩も亦妙案なりとして之を贊成する者なり或は日本の演劇を言語不通の外國人に觀せたる處にて臺辭所作も一向分らずして興味も薄かる可しとの説あれども是れは決して掛念に及ばず現に始めて我國に來遊したる事情不案內の外國人が日本の演劇を見て感服したるの談もあると同じく以太利佛蘭西の語に通ぜざる米國の群集が其音樂芝居を聞見して矢張り妙味を感ずるが如く苟も藝にして妙を極むるときは人の視聽を動かすこと難からず言語の不通は問ふに足らざるなり單に出品を奬勵して多く精良の物を出すも其評判を得るの工風なきときは萬國博覽會場に各國の出品と區別して日本特有の技術を知らしむるとは至難なる可し當局者の注意を望む所なり

官報

○內務省告示第十號

一高知縣民吏兩黨の激戰(圖畫)　三枚續キ

東京日本橋區馬喰町二町目十一番地澤久次郎發行

右出版物ハ治安ヲ妨害スルモノト認ムルヲ以テ其發賣頒布ヲ禁ス

明治二十五年二月十七日

內務大臣子爵品川彌二郎

雜報

笑話

次團太が何を云ひしや(外國笑話意譯)

良人　時にお前や此身はお前に次團太が話したことを話さうと思ふが此身と次團太がネ

妻　貴下は何處で石龜次團太さんにお逢ひなすッたんですよ

ナニ一寸と一處に料理屋に行たのサ夫れからネ

如何して御一處に料理屋にお行でなすッたんです

ナニ一處に行たと云ふ分けでもないが實は料理屋の前で出ッくはしたのサ

夫れは一體何處の料理屋ですネ

今廣サ夫れから次團太がネ

オヤマア如何して今廣に行らッしやッたんですネ平常お晝食は松田で召上るじやありませんか

平常は彼家に行くが今日はフイト次團太と一處に今廣に上たのサ

夫れじや彼の人は平常今廣に行くんですかネ

と良人は少し聲を勵まして

次團太が彼家に行くか行かないか夫れを此身が知るものか縦や行くにしても行かないにしても次團太のことの話には丸で緣のないこッちやないか

と妻は手持不沙汰に言葉を早めて

夫りやマアさうでも御在ませうが唯如何だかと思てお聞き申した計りで御在ますよ夫れから次團太さんが何テ云ひましたと

されば此身と次團太と吸物を吸ひ始めた時にサ

何のお吸物で御在ましたネ

鯛の吸物サ其處で次團太が云たにはネ

オヤ貴下は鯛はお嫌ひだと思ひましたが

ウンおんまり好きでもないが併しお好きでない物を故何お誂へなさいましたと云ふに良人はキッパリと成りて

誂へたから誂へたのサ併し何も吸物の素性が次團太の話した話しに緣もあるまいじやないか

妻はヤッキとなりて

夫りやさうで御在ませう私が何時緣があると云ひました何も如其にツッケンドウに云はなくても宜いじやありませんか夫れから先きを話して下さいナ

ウン其處で此身と二人が吸物を吸ひ始めた時に鶴田龜太郎が先日もらッた御新造と一處に這入て來てヘー來ましたと

來たと、たッた今云たじやないか

如其に遣込めなくても宜いじやありませんか一處に這入て來てネ夫れから

御新造は奇麗で御在ますか

可なりサ、スルト次團太が挨拶をして

ヘー次團太さんは素から龜田さん夫婦を知て居るんですかネ

知らなくて挨拶をするものか分らないたッ

御新造は如何な着物を着て居ましたネ

如何して夫れが此身に知れるものか此身に着物なんぞが見えるものかマアサ如其ことは如何でもとして此身の話さうと云たのはネ

鶴田さん夫婦は貴下の側に來ましたかネ

ウン衝立ひとつ距て隣に坐込だのサ鶴田夫婦が料理を誂へてる間に次團太が云ふにはネ

と云差したる時妻は膝を進めて

オヤ何と云ひましたと、へー夫れじやァ龜田さん二人にや全く次團太さんの云ふことが聞えなかッたんですネ

と云へば良人は嚴然として

石龜次團太は此身の朋友で一通りは物の道理も分た男夫れをお前が何だ次團太は人の事を話すのに其當人に聞える樣に話す樣な馬鹿だと思ふのか、分らないたッて

ホウヅがあら、馬鹿〳〵しい

何ですと面白くもない一寸とした話しをするのに癇積を起さずに話すことが出來なけりやァよう御在ます止めにおしなさい一體、次團……
次團太が云たにはネ鶴田……
の婚禮に付ちや大不服が……
代の釣合も考へずに無理……
ヘーさうで御在ますか夫……
出したんでせう
ソラ復始まッた鬱陶敷く聞……
モシ貴下あらためて申し……
話しをして居ると思てる……
下の戀女房じやありませ……
可き言葉づかひですか
イヤモウ戀女房か何女房……
胸の惡くなるまで癇積を……
身やモウ狂人にでも成り……
何ですと
人が話しを仕やうと思ふ……
と云ひ掛けたる時、妻は……
私はいくら貴下の女房で……
聞て居られません
お前は何一ッさへ默て聞……
から仕樣がないんだ
ヘン私が何も難しいこと……
こと計り聞て居るのに
那易いと、成程さうだろ……
最易いことを聞たか知れ……
何でもない石龜次團太が……
次團太さんの話したこと……
かなくてもよう御在ます……
今日は引込で私の室で御……
を前に置といたら嗽御飯……
と障子の竪付も荒く……
後にて茫然たり

○○○○○○群馬縣の騷擾　群馬縣……
は日を逐ふて激烈に赴き……
暴漢百餘名は西群馬郡有……
を取圍み瓦石を擲ち暴行……
は警鐘を鳴らし危急を告……
り互に爭鬪を始めしが間……
出張して之を鎭靜し暴漢……
二時頃なりしと云ふ是れ……
下取調中なりと云ふ

○米穀輸送の注意　近頃……
從ひ奧羽地方沿線の各郡……
に廻送するものも追々增……
印にて積み送るものあれ……
のみならず途中積入積卸……
混合し爲めに取調べの日……
誤る等の恐れなしとせず……
し汽車盤積の別なく一俵……
を此程東京廻米問屋市場……
しといふ

○正米の弱氣　三陸米の……
々東京に輸入すべき聞へ……
んとし陸路は汽車に積込……
時に同地產米の府下に向……
錦なるやと云ふに是迄北……
に仕向けしも最早……